

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和5(2023)年
12月号
通巻640号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和5年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>

▼昭和44(1969)年
『すさのお』10月号表紙写真
法主様撮影の日置神奈備と日置川



左の社は日出神社(古くは月宮神社)で太古の祭祀場だった。道路が岩盤を切断して、川の中に少しばかり残っている(法主様の説明より)。

日置神奈備と日置川

高橋良美さん撮影(4頁・大倭会文化行事報告)

昭和45(1970)年12月23日 降誕祭法話より

自分の使命を自覚して生きる

法主 矢追日聖(満59歳)

誕生日は道標

今日は私の誕生日で、明治四十四年(西暦では一九一一年)生まれの満五十九歳でございます。ちょうど次の天皇になられる皇太子さん(※現在のの上皇)と同じ十二月二十三日です。皇太子さんの方が後からお生まれになったので、私の方がかなりお兄さんですが、次の天皇を継がれる方と同じ日に当たっておられるのも、何かの因縁、私個人ではなしに、大倭と何か関連性があるんじゃないかというようなことを思うんです。

毎月二十三日は月次祭で、たまたま私の誕生日と同じになっておるんです。今日は大勢お祝いに来ていただいて、例年より何か知らんけれども賑やかでございます。このような賑やかな祭壇は初めてのような気がします。

何かの神意に基づいて、期せずしてこういう形が出来上がったものと思いますけれども、誰も計画してやったのではなく、神のまにまにこうなってきたんじゃないかということが、非常に喜ばしく思います。

誕生日と言うと、普通おめでたいと誰でも言うんですけども、私の場合はどうも昔からそうではございません。人間の世界で生きる時間が一年短くなっていくということ、誕生日は道標のようなものであると思うんです。大体二十歳とか三十歳頃までは、生きるということに楽しみがありますが、人生半ばを過ぎま

すと、普通の人だったら悲しいと思ってしまうところを、私は先が短くなるほど嬉しいんです。

六十で一つの周期になっておりますので、私も還暦です。これで人間として一回り生きさしてもらいましたし、するだけのことはさしてもらったんです。

現実の自分を見た時に、自分の先天的に持ってきたお役目というものは、もう済ましておるんですね。これから例えば半年なり一年なり寿命がもたらえなければ、それは六十年経って後の蛇足または延長に過ぎないというわけです。

私個人としましては、長生きすることに喜びもございませんし、そうかと言って早く死のうと望んでおりません。ただ神意に基づいて、自然の成り行きです。

神は自然の摂理のこと

神とか神意と申しますと、木仏金仏のように形のある、特定の神さんが出てきて指図や命令があるように受けとられるかも知れませんが、そういう意味ではございません。自然の摂理ということを私は神という言葉で表しています。「加美」という漢字を使ったりします。

この「カ」と「ミ」という大和言葉の中に含んでおる魂とか心とか、その「言霊」は、言い換えると「自然」に当てはまると思うんです。

大和の人達は、自然のことをすべて「カミ」という名において表現した。だから、自然によって出来たもの、自然によって起こって来るものはすべて神様の働きです。

自然の力というものを、もうひとつ深く言えば宇宙の生命体であり、これはもう宇宙の根本のエネルギーですね。私はこの宇宙の根本のエネル

ギーを称していつも神という言葉で表すんです。

神は一人ひとりの肉体の中にもいる

私達の肉体の中にも神の働きがある。私達が飯食って糞するのも、自分の意思でやっておりません。また空気を吸うたり吐いたりする働きも、あるいは寝る起きる、物を考える、そういったすべての能力は、みんな自然の摂理に基づいているのであって、自然の力によって生きさせてもらっているんです。我々のこの肉体の中にも、そういった意味において無限大の神の働きがある。大倭ではそういうようなものを称して「神(加美)」という言葉で申しておるんで、既成宗教の言うような神と、大倭で言う神とは意味が違うんです。

今日も皆さん集まってお祭りしております、この前にご本尊があると誰しも思うかも知れませんが、これは単なる祭壇であって、田畑の中でも山の中でも家の中でも、どこでも構わないんです。祭壇に、いわゆる神というのはございません。ここはただ祭典儀式をする道具を並べてあるに過ぎない。本当の神様は、神様を拝んでいると思っ

ているあなた達の肉体の中に鎮まっています。それをあなた達はよく自覚して欲しい。あなた達の肉体はお社でもあるんですよ。

祭壇の中は空っぽです。本当の神さんはあなた達一人ひとりの肉体の中に宿っておられるんですよ。それをよく考えて欲しいと思うんです。

祭壇に頭を下げて、品物供えてお賽銭供えて、神様ご利益くださいなんていうような心で拜んでもらっても、神様はおりませんからご利益があったら不思議なんです。ところが木仏金仏並べたところに神さんがおると、だからここでお賽銭をあげて拝めばご利益をくれると、そういうような言

い方をしている既成宗教がたくさんございます。けれども、これは全部嘘を言っているんです。

「昭和維新の比登柱」の意味

先ほどの聖歌の中の言葉ですが、二十五年前の昭和二十年、日本は戦争に敗れ、それによって日本も変わりました。精神も大分変わってまいりましたけれども、そうしたひとつの過渡期が維新ということでございます。

何も血を流すとか戦争するとか、そのようなことだけを指して維新とは申しません。精神的に変わって行くことも、新たになって行くんですから維新です。大倭では、宗教の世界の昭和維新という意味で、そう言っているんです。

我々の精神と形の世界は、密接不可分な関係にはありますが、精神的方面というものを主体に扱っておるのが宗教の世界です。人柱の人という意味も人間としての人ではないんです。

私達は受胎した時から、一人ひとり何らかのお役目を持って生まれてきておるんです。そうした先天的に持ってきたすべてのものを自然の心に従うように發揮していく。自分の持ってきた使命を神の意思通りに發揮していける、それが「比登柱」であると言っています。大和言葉で「ヒ」と「ト」は、昔からそのような意味を言います。

仮に五十人おった場合に、その人達が神から与えられた自分の使命を素直に実行した場合、その一人ひとりが「柱」になるわけです。

柱と言っても例えば一軒の家にも大黒柱もあれば軒先の柱も、色んな種類の柱が集まって一つの家屋が出来上がるように、神というものはその時代に色んな役目を持たせて、この世に送り出しているんです。そこで自分の使命というものを自覚

し、ひとつの信念によって動く人間が「人」であり、神様から見て人と言われる資格のある者一人ひとりを指して「柱」と言うんです。生きている人もみんな柱です。

聖歌にあります「昭和維新の比登柱」というのは、そういう意味の言葉でございませうから、英霊のような死んだ人をとらえて一柱、二柱とか言うような生血生臭い、あるいは犠牲を払うとかの意味ではございませう。その点をよく理解して欲しいと思います。

宗教革命としての大倭の宗教

私も数えて六十でございませうが、昭和のどきどきさの維新の中のひとつの柱であり、あなた達みんなもひとつの柱でございませう。その柱が自然(神)相応のお役目を果たすことによって、社会というものには神様の心の通りにいけるように仕組まれているはずなんです。けれども自分だけの利欲に走るような、神の心、自然の心を無視した生き方をすると、お互いが暮らし難くなる。

これからの次の段階は、大倭が申しますところの宗教革命でございませう。自然というものの、神というものを中心にして、私達人間がこの自然に順応していく、逆らわないで従っていく、そのように自分を鍛えていくこと。これが大倭の神ながらの宗教というものでございませう。

礼拝中心の信仰は大倭ではやっておりませう。特定の木仏金仏とか神さんとかを相手にして信仰する宗教ではございませう。

神ながらの、本当の信仰をするのであれば、自分の心に向かって手を合わせて欲しいと思うんです。自分の心が信仰のご本尊なんです。

本当に信仰したければ自分の心に向かって信仰

したらいい。古代の人達は、川とか山とか、そういうところで祀まつをしていました。それを禊みそぎ払いの行ぎやうと言っているんです。自分の心の持ち方や自分の心の在りかたというものを、いつでもそこで訓練しておいた。

古代の集団は今のような組織のある国ではございませう。ひとつの生活体として大勢の人達が集団で生活しておるんですが、そのような時でも、いわゆる権力とか権威とかいうような人達はおりませう。みんな川原へ出て、一緒に禊みそぎをする。自然の中から受け取る感応によって、我々はどうすべきかということを決み取った。

人間の命令によって物事を進めたんじやございませう。みんなが川原に出て靈動したり自己反省したりして、我々の集落は今年はどうすべきだということか心の中心に閃いて来たはずなんです。また例えば一つの集落で喧嘩が起った時の判決でも、人間が人間を裁くんじやなくて、禊みそぎをして無心の状態になって、その中から出てくる感応によって裁いていく。いわば神の心によって裁かれた。それを一番よく聴ける人は、「審神者(さにわ)」と申します。素直に混じりつけなく神様の心を受けとる人が審神者になるんです。

神様の心を受け取って、その神の心によって集落全体を治めていく。その審神者というものが、現在で言うスメラミコトであって天皇なんです。

古代日本の天皇というのは、神の心によって治めていく人で、これは人間が与えた資格ではございませう。

古代のスメラミコトのひとつの形が現在の皇室の中に伝わってきておるわけですから、それはある方が結構なんです。ないよりはましです。そういうものがないと、やっぱり社会はうまくいきませう。皇室とか天皇があることはまことに結構なん

ですけれども、その本質というものが昔のスメラミコトから段々と崩れてきて、権力者の位置に入り込んできた。これはもう墮落なんです。

絶対平等の中の不平等

あなた達の家庭の中においても主人というものが家の中のスメラミコトになってもらわなきゃいけない。

そして宗教で言うご本尊は自分の肉体の中に鎮まっておるんだということを考えたら、親も子も兄弟も、家庭中みんな一人ひとりがその肉体というお社に、神様を持っておるんやから、憲法で説明すれば、これは基本的人権の平等ということになるんです。それによってお互い仲良くしていく。

ところが神ながらは全部不平等に出来ています。不平等に出来ておりますけれども、そこに絶対平等があるんです。

具体的に言うならば、我々が生まれてくる時には、無一物で何一つ持たない裸一貫で生まれてくる。これが絶対平等なんです。着物を着て生まれた人は聞いたことがない。だから、これは全部平等なんです。そして死んだ時には白骨になってしまおうという平等もあるんです。

神様の言う平等はその意味での絶対平等です。ところが自然の仕組みというものは、全部不平等に出来ているんです。

動物であれば犬も猫も猿も人間もと、色々な種類の動物がいる。また虫でも色々な種類の虫がいるし、花にも色々な種類の花がある。何故神様は平等にしなかったのか。そのように仕組むところにお互いの楽しみがあるからなのか、とにかく別々のものが作られておるのは神の心やから私にはどうこう言えませう。

人間の場合でも一人ひとりの顔かたちが全部違っているんですから、平等ではございません。背の高さも全部不平等です。頭の能力も全部違います。そのように形の世界は一切不平等ですが、自然が作っておるもので、我々が作ったわけではありません。

出発と終点においては絶対平等なんです。けれどもその中間において能力差というものの、いわゆる区別があるわけなんです。

神様は区別して作られておるんやから、例えば知識のある人は十分勉強して、その知識を社会へ流す。発明発見の出来る能力者は一生懸命色んなものを拵えて、社会みんなの生活が楽になるようにしてあげたいんです。そこで自分の能力を、能力の無い人と比較して、俺は偉いんやと自惚れたり威張ったりすると、神の心に逆らいます。

自分の持つてきた能力、持つてきたお役目(命)というものを素直に伸ばしていけば調和がとれるんです。その点をあなた達もよく考えて欲しい。

みんなお役目を持つて生まれている

私がここでするような宗教的な話を聞いて、何とか人生の生きがいというものを見出す人も社会にはおりますから、私のお役目として話しております。別に偉くないんです。

社会的地位とか名誉とか欲とか、そんなものを抜きにして皆が自分の本当の使命感によって動くならば、世の中はうまくいくと思うんです。それを自分が能力者に生まれて俺は偉いんやと考えてしまうのは、神意に逆らうことなんです。

学問が出来なくても身体が不自由であろうと卑下する必要なんてありません。神様が作られたんやからそれも神意です。神ながらの宗教において

は、優越感とか劣等感は絶対禁物なんです。

お互い一人ひとりがお役目を持つて生まれてきておるんやから、みんな仲良くいこうやないかというのが神ながらの宗教のあり方です。

神さんを祀って三方で物を供えて賽銭あげて拜む、そんな形を宗教だと思っるのは下の下なんです。けれどもこういう行事はあつてもいいんです。私達が着物を着て道を歩くのと同じように、朝挨拶

第349回大倭会文化行事報告

大倭に縁りの地を訪ねて紀伊方面へ

佐渡から子供2人孫2人と一緒に

新潟県佐渡市 平田 緑

昨年は、文化行事で佐渡の桃華園に来て頂き、たくさんの人達をお迎えすることができました。ありがとうございました。今年は、皆様とご一緒に秋の文化行事に参加しました。私は、大倭会館に2日前から宿泊し、奈良の友人と一緒に楽しい時間を過ごし、また2日続けて大倭のお墓参りもできました。夫のお墓参りに友人と一緒に行きましたが、何故か柴地さんのお墓だけが光って見え、一緒にお参りさせて頂きました(合掌)。

10月1日(日)朝9時にバスで出発し、27名高野山に向かいました。親戚のような温かい空気感が、そのバスにはあふれていました。ご挨拶をしながら後部座席に座らせて頂いたら、隣は柴地暁子さんでした。藤の木台で昔、あじさい薬局をしていた暁子さんと私は初対面にもかかわらず、女生時代の友人の様に話しました。亡くなられたご主人の柴地(則之)さんの話、「とおやまと子供診療所」の石垣清水さんの話、私が佐渡で行っ

探するのと同じようにひとつの儀礼です。手を合わせて拜む、お供えもして飾るというのも結構です。ただしこれが神ながらの宗教の本質だと考えてもらつては大きな間違いです。そこをあなた達はよく理解して欲しい。

神ながらの宗教によって、我々人間の道というものを通じていきたいと思うんです。

(文責・編集部)

令和5年10月1〜2日

ている「フードバンクさど」の活動などです。その中で、暁子さんは「天然な人で可愛らしい女性」と分かりました。これは、ご主人が好きだったのかしらと推察しながらの、素敵な時間でした。奈良に住んでいた、35年前に戻ったようでした。山道を通り、バスの運転手さんの上手な運転に身を任せながら、高野山や狭い道をごんごん行きます。佐渡への道のりも長いバス時間と以前書かれてましたが、なかなか大変な時間でした。龍神温泉・希楽里館の美味しい夕食を頂き、自己紹介の時間。その後、皆さんの2次会の集合場所には旅の疲れが出かけられず、残念でした。

翌日は、お昼ごはんを皆様とご一緒させて頂き、その後、南紀白浜でバスから降りて別行動しました。孫と娘は釣り堀で釣りをし、その間、私は近くの温泉に入りました。

南紀白浜アドベンチャーワールドに10月3日に行きました。動物がたくさんいて、特に「ライオンの餌やりが楽しかった」と、4歳の孫が言っていました。その翌日は、奈良公園の鹿と遊んで、佐渡に帰りました。

今回の旅行も、昨年の佐渡旅行に来た人も、一

期一会で特別な人達との出会いの場と理解しました。また、チャンスを作って参加したいです。

息子2人、初めての文化行事

新潟県佐渡市 平田 舞姫

新潟県の佐渡島から、やんちゃな息子2人(長男・友悠4歳、次男・大和2歳)と参加させて頂き、私の幼少期の思い出が蘇ってきました。今から35年ほど前、奈良市佐紀新町に住んでいた私達家族は、あじさい邑で働く、父・平田弘之(令和2年5月帰幽)と、大倭の行事に度々参加していました。私達子供5人がいて、相当騒がしかったと思いますが、法主さん、かあさん、(青山)日元さん、大倭の皆様には大変可愛がって頂きました。父は大倭に行くと、いつも嬉しそうに、ニコニコしていたのを覚えています。

私が大学生になり(東京在住時)、学会が大阪で開催された際、かあさんが入院しているとき聞き、大倭まで1人で会いに行きました。かあさんは「遠いところから、よお来たなあ。ほんまにありがとう。みんな元気でやっとなるか?」と言って、手を握ってくださいました。また、突然だったのにも関わらず、たくさんのお小遣いまでくださいました。そして、話している間中、かあさんのことが心配で、ずっと涙が止まらなかった私に、「大丈夫やかな。な〜んも心配することはないでえ」と言ってくださいました。それから数週間後、かあさんが帰幽されたことを聞きました。あの時、話すのもつらい状況だったかもしれないと思うと、本当にありがたく、かあさんの思いやりに感謝してもしきれません。

そんな思い入れのある、大倭の文化行事に、息子たちと参加でき、色々な記憶も蘇って、なんだ

か感無量でした。

今回、初日に行った高野山、奥の院では、2歳児の大和も最後まで1人で歩いてお参りでき、旅の良い思い出となりました(写真①)。その夜、龍神温泉の懇親会では、父の話を参加者の皆様からお聞きすることもでき、大変貴重な時間となりました。父が大好きだった大倭の皆様と交流することができたこと、本当に嬉しく思っています。

翌日は、南紀白浜アドベンチャーワールドにも行き、最後まで楽しい時間を過ごすことができました。文化行事に参加された皆様、役員の皆様、大変お世話になり、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

またたび

東京都板橋区 平田 太一

10/1日曜日、大倭会館で起床し天気は雨。法主さんのお墓へまずは行きました。そして大倭神宮と大倭墓地へ。

旅行中みなさんのお話を聞いていて、30数年前の記憶……法主さん、かあさん、日元さん、シヨーちゃん(中村昇次)のこと紫陽花色のことをなんとなく思い出しました。平田弘之の話も聞きました。旅は弘之も一緒にいたのでしょうか。

10/2大倭到着後に、法主さんのところへ。そして教長さんにお礼まいり、和歌山のお土産をお渡ししたところ、「そんななんいらんわ。安心せい、墓はちゃんとやっていくからな。もううとくな」。それでもって墓地へ行ってみました(写真、「大倭邑人鎮魂比室城」)。



修行中の身ですが法主さんの教えには中々たりつきません。みなさんと旅行して、大倭も大倭のみなさんもなんかいいなと感じました。ありがとう、ございます。「またたび」とは、旅やひととの交流で心がゆれうごくさまを表現しています。



⑩高野山奥の院



②長慶天皇陵



⑤目出神社にて



③平維盛塚



④雲海

哀歎の熊野路

大阪府枚方市 林 修三

10月1日、あいにくの小雨模様の天気の中には、前日までの異常な暑気をはらうかの様な清涼感があった。午前9時前、すでに奈良交通バスは集合場所の藤の木台バス停裏のロータリーに着いていた。何と昨年の佐渡旅行で一緒に過ごした同じ鶴羽運転手さんだった。嬉しい良い予感の旅立ちとなった。

9時15分、予定通り出発。大人25名、子供2人。バスの後には、一家で佐渡から参加された平田家の長男、太一さんが運転される車が同行した。

午前11時10分、高野山に到着。予定時間50分以内で、空海さんのおられる奥の院迄の往復となった。団体行動とはいえず、大傑らしい各々自由自在のおまわりとなり、無事全員、時間厳守でバスに帰着。中でもトイレに行かれ一足遅れたはずの杉本さんが、奥の院には我々と同時に着かれていたのには驚かされた。まさか……。昼食は高野山の橋観光センターで。

そしてバスは一路、龍神スカイラインを走る。雨は次第に激しく、先も見えない滝の中を走るかの様。雨も小降りとなり、傘なしでも歩けるくらいになった頃、長慶天皇陵に到着(南北朝時代の南朝の天皇、足利勢に追われていた)。ここは去年、私と高橋良美さんのコンビでの「ミニ文化行事」の折、偶然に行き着いた場所であった。

御陵の前の奈良泉野迫川村による案内板に、次の一文がある。

《…略…》こゝ野迫川村の弓手原では、長慶天皇が険しい山々を歩いて下向を続ける途中、この地に辿り着いたとされ、その時の天皇の様子は、

長旅により疲れ果て口もきけない程空腹となり、杖にしていた弓で腹を叩いて空腹を告げられたそうです。その事に由来してこの地が「弓手原」と名付けられたとの伝説が語り継がれています。その後、この弓手原の地で終焉を迎えられたとされ：地区の方々に祀られてきました。》

御陵は全国に70ヶ所以上など諸説があるという。御陵とは言わないまでも間違いなく因縁深き場所である。今回大傑の皆様とおまわりさせていただきありがとうございました。わけても眞の長慶天皇の御陵墓があるという青森からはるる参加された高橋延之さんが、日本酒をお供えして祈られていた姿が印象深かった(写真②)。

続いてバスで30分程の距離にある「平維盛歴史の里」へ向かう。維盛は平清盛の直系の孫で(その子「六代」は、法主の父隆蔵さんの前世であるという)、美貌の貴公子で舞の名手であったとされる。平家の大将軍として富士川や俱利伽羅峠で、源氏と戦ったが敗北して都落ちの後、長慶天皇と同じく熊野、吉野山中を流浪の末、野迫川村で亡くなったとの伝承がある。午後3時頃到着。

小高い平維盛塚へ皆と一緒に登る(写真③)。絶景！雨にけぶる山々、雲また雲と湧き上る雲海の不思議を堪能する(写真④)。また広々とした敷地内の資料館等を見学。

そして向かった1日目の最終予定地である龍神温泉の宿「季楽里」には、4時20分到着。ロビーでホテルについて説明を受け各自の部屋へ。5時半、宴会場に集合して林・杉本により今回の旅行に縁のある歴史上の人々への解説。6時より宴会と進んだ。

食事の途中から自己紹介が始まり、皆さんについて改めて知ることも多かった。各々の席での話題も盛り上がり3時間はアツという間に過ぎ、8

時半、中島健さんの発声による弥栄三唱でおひらきとなった。「三大美人の湯」と銘打った龍神の湯は、スベスベとした肌ざわりのすばらしいお湯で大好評だった。

※出発前に大倭会岸田会長のもとへ、今回不参加の且田容子さんから「バスの中で皆さんに読んであげて下さい」と速達が届いたとのこと。龍神温泉と且田さんの父・故森下新蔵さん(大倭会の前、すさのお会だった当時の会長)とのお話を8ページに掲載。併せてお説み下さい。(編集部)

2日目、午前9時、宿を出発。10時半に最初の予定地である白浜町日置の日出神社に到着(写真⑤)。54年前に法主の紀州教導の折に訊ねられた所である。昭和44年10月号「すさのお」紙の法主の文章から抜粋してみる。(表紙写真参照)

《…略…》日置の神奈備には海の龍神がこの山をヒモロギとして棲まい、船出には必ず神地の岩盤上でお祈りをした人々を守っていた筈である。： そうした時代にあつてはこの神奈備に祈ることが生活上重要な行事であつた訳だが、現今は僅か古代人の禊場であつたこの地を神社として、細々ながら太古の面影を留めているに過ぎない。この地方に住む人々の中に、彼等の大先祖達が命を掛けて信仰し、子孫の繁栄を乞ひ願つたその真心を、肌で感じとる者がどれだけあるであろうか。寒心に堪えない。この実感は月宮神社(明治の神社合併で日出神社と改名)へ詣つたとき、あちこちに在る固有霊からくる嘆きの訴えであつた。胸がつまり涙が出た。：》

個人的には現在この地はどうなっているのか？子孫の方々は？と、多少の不安を抱きながらの訪問となった。

ここで今回の紙数が尽きた。この続きは次回に。

寸 莎

第152回

森山 まゆみさん



ご縁の中で生かされて

今回登場してもらうのは大倭印刷のコンサルティング事業部のスタッフであり、休日には自宅でピアノ教師というもうひとつの顔も持っている森山まゆみさんである。ゆつくり話しを聞かせてもらうのははじめてだったが、打てば響くような明るい笑顔でご自身の思いをじっくりと語ってくれた。

「長男が1〜2歳の時に育児サークルの『二名おはなし会ポニー』と出会い、その後さまざまなお縁が重なって」大倭印刷に辿りついたという長い道のりを楽し気に説明してくれた。その中で、かつて紫陽花邑の住人だった矢部后代さんと「二名おはなし会」を通して深いつながりができたり、三碓小学校のPTA会長を務めていた時に、現在は「直属の上司」である青山法義さんに出会

ったことが大倭印刷に入るきっかけになった。

「おはなし会が企画した夏の宿泊キャンプに参加すると、大人が遠くから見守るというスタンスで、子どもたち自身がお互いにリーダーを選び、キャンプ生活を自主管理する中で逞しく成長する姿が新鮮だった」と言い、今でもその活動には参加しているとのことだった。

話しをもとで森山さんご自身の生い立ちにふれてみよう。兵庫県伊丹市で卯歳の12月1日生まれである。結婚して奈良市に住みつくまで、ずっと伊丹市の住人だったとのこと。

「家族が仲が良くて、親がノビノビと見守ってくれたので、のんびりしているけれどお調子もの」に育った。「空気を読むのはニガ手だったけれど、友だちとはいい関係だった」という子ども時代だった。

母が音楽好きで自分もやりたかったこともあり、幼稚園の時に「ピアノが習いたい」と言うとすぐに習わせてくれた。小学4年生で学校のコーラス部に入り、5年生からは伊丹市の少年少女合唱団に所属した。結局最後は、武庫川女子大学の音楽学部声楽科に進学するまでになつて「音楽愛」が持続した。

十数年前からは自宅でピアノを教えるようになったが、「音楽はあくまで楽しむものであり、無理に教え込むのではなく、子どもたちがピアノを楽しめるように寄りそっている」という。自分自身も、「多少しんどいことがあっても、音楽の力で励まされている」と語る。娘さんと一緒にカラオケに行くこともあるという。

平成10年12月に結婚して奈良での生活をはじめ、さまざまな出会いを経験することになる。「娘が小学校の高学年になった頃に、デイサービスのパート職員として介護の現場でピアノや歌を担当することになり、ここでも音楽の力を思い知らされた」

「PTAの活動にかかわっていた時に、自分の事務能力の低さを痛感して、何とかそれを改善したい」という思いもあって、大倭印刷のパート事務員の募集があると聞いた時に、「ぜひやってみたいと感じ」平成30年5月に入職した。

「あわてん坊なのでミスは多かつ

たが、周囲から親切に教えてもらるので、気持ちよく前を向いて仕事ができたと職場の雰囲気は助けられたとのことである。2年前からは正職採用になり、昨年4月から事務と営業の兼務となり、「忙しいけれどやりがいがある」と意欲的である。

「小さい時から『まんまんちゃん』に手を合わせるということが家庭の中で習慣になっていたので、大倭で語られている『目に見えない存在への敬意』ということに対しても全く違和感がなかった」とごく素直な口調で語る。「ここは自然が豊かで、春は桜や新緑、秋は紅葉と四季を通じてさまざまな楽しみがあるのでありがたい」と目を輝かす。

これからの抱負はと聞くと、「家族や仲間と仲良く暮らしていきたいし、自分は強いようで弱いです、大きなご縁の中で生かされていることをしっかりと自覚しながら生きていきたい」と謙虚である。それに「これから人の役に立ったり何かを発信していくためにはインプットが必要だと感じている。そのために見たり聞いたり学んだりする時間も大切にしたい」と前向きである。

血液型はB型。好きな色は赤、青、白、黒とはっきりした色。映画などにすぐに感情移入して泣いたりしてしまうとのこと。(聞き手 岸田哲)

あじさい日誌

11月12日 拜殿で山極壽一さんによる大倭会文化講演会。屋久島の手塚賢至さん始め各地から120人余り。後の懇親会には甲野善紀さんの飛び入りもありで大賑わいでした。報告のまとめは来年3月号の予定です。

11月13日 大倭会館で朝10時から佐藤円さんら20人ほどの集まり。甲野さんはこちらが本命の来邑だった由。邑の見学後、大倭神宮にお参りされました。

11月15日 大倭神宮月次祭。久しぶりに大倉有宏さんが参拝。

11月18日 FIWC定例委員会

11月19日 奥津斎庭の金剛龍王の寝床という神籬の周りに新藁を敷く神事が行われました。

11月20日 井原恵美子さん(兵庫県西宮市)が大倭会館で一泊して、翌日、教務本庁で懇談。

11月23日 大倭大本宮月次祭。この日の法話は、昭和38年11月23日月次祭から、平成20年11月号「おおやまと」に「神ながらの道によって人間的向上を」として掲載分でした。祭典後、邑の銀杏を頂きました。

4時から大倭会の役員会。

11月25日 「ホテルリガール春日野」で大倭町自治会懇親会。

邑人も10人が参加しました。

12月2日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会。

12月3日 午後、大倭会館で甲野さんの講演と実技。数日前に連絡があったという急な催しに参加者37人の盛会でした。

12月4日 大倭神宮金鶏祭。

12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では11、12月 各種表彰。感染症対策で授賞式は欠席、来死されての伝達式などになりました。

(菅原園)

11月30日 中庭で炭を焼き焼き芋会をしました。

新年のご挨拶を申し上げます

「神かみながらの法」は有形無形を問わず、微に入り細にわたって相對即一体に仕組まれているので、つまり両者が調和することによって平穩が保たれるのである。ここに創造の加美かみの心がある。こうした加美の心が真実であると信ずる者は、自然の摂理に対しては、絶対に順応しなければならぬであろう。人間お互いがその個人差を認め合い、理解し合った観点に立っての調和が加美の心に順応することにもなる。加美がこの人達に真の平和と喜びを齎もたらすことは必然である。更に肉体と精神の關係の如く、姿をもつ人間(現界人)と、姿をもたない人間(靈界人)同士が、互いに親しく交流して調和を図ることが、加美の心に添う最も大事なことからである。

野草社『ながそねの息吹』256頁より

大倭八十年 元旦

宗教 大倭教 教長 矢追 家麻呂
紫陽花 邑人一同

(須加宮祭)

11月20日 プレゼントのチューリップの球根を植えました。

(長曾根祭)

11月22日(デイ)可愛いクリスマスツリーを作りました。

11月12・19日(特養) 外気浴をかねた紅葉見学。

(茂毛路園)

11月24日 「安全祈りの日」として黙祷を捧げました。

(八重垣園)

12月1日 創立記念日を一人鍋でお祝いして好評でした。

且田容子さんの手紙

父・森下新蔵と龍神温泉

新蔵は土族の家系で彫金師の父と髪結いだった母の間に生まれました。新蔵一歳の時に父が亡くなり、母は家風に合わないの家を出されたそうです。六十歳くらい?の姑(祖母)が乳飲み子の新蔵を育てるには、お餅をぐつぐつ煮てトロトロにしてミルク代わりに与えたいらしい。

小学一年生の時に、ボールが脛すねに当たって腫み、結核菌が骨に入る病気になる身体を次々と包帯していたそうです。

祖母が亡くなる前に、大阪の粟あはおこしの珍珍堂の若大将が親戚で、そこへ勤めに行く話になったようです。

けれども包帯の生活が嫌になつて、持ち金を腹に巻いて、和歌山の田辺から乗り物の最終駅で龍神温泉に向かつて、山越え

あんない

するつもりで歩いたそうです。途中、倒れているところを郵便配達の人に見付けられ、リヤカーに乗せてもらって到着。

お金のあるだけ逗留したり、温泉のおじいさんに可愛がつてもらい風呂掃除や雑用の手伝いをしながら一、二年、温泉の湯で九割ほど回復したそうです。皆さんも湯に浸かって元気になるからお帰り下さい。

*年始祭(大倭神宮)
1月1日(祝) 午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)
1月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大とんど
1月7日(日)、成人の日を變更午前9時半〜10時半(厳守)、大本宮西の齋庭にて注連縄や門松等を火にあげる神事です。尚、天候による變更もあり得ます。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*大倭会主催祝会
1月14日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*月次祭(大倭神宮)
1月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
1月23日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。